

大学生アスリート版プレゼンティーズム測定尺度の開発

酒井 佑 (筑波大学大学院)

1. 目的

本研究では、プレゼンティーズムの定義を「スポーツ現場において、身体・心理・社会的イベントを我慢して練習に出席する態度」とする。大学生アスリートのプレゼンティーズムを定量化するための心理尺度を開発し、その発生要因を検討することを本研究の目的とした。

2. 研究方法

- 1) 対象者：全国の大学生アスリート 296 名
- 2) 調査方法：Google Forms を用いたインターネット調査および紙媒体を用いた集合調査

3. 結果と考察

1) プレゼンティーズム傾向尺度およびプレゼンティーズム動機尺度について、一般化最小二乗法、Promax 回転を用いた探索的因子分析を実施した。因子負荷量.04 以上、解釈可能性を考慮し、因子構造の検討を行った。その結果、プレゼンティーズム傾向尺度について、4 因子 31 項目が (表 1)、プレゼンティーズム動機尺度について、4 因子 19 項目が抽出された (表 2)。

因子名	項目例
F1：心理・対人的問題 ($\alpha = .903$)	・指導者と人間関係でトラブルがあったとき ・精神的に追い詰められているとき
F2：学校内外のイベント ($\alpha = .856$)	・学校の講義と練習が被ったとき ・就職活動の予定があるとき
F3：身体的不調 ($\alpha = .822$)	・吐き気があるとき ・発熱したとき
F4：怪我 ($\alpha = .754$)	・練習を行うことに支障がある怪我をしているとき ・練習場所に向かうことに支障がある怪我をしているとき

表 1 プレゼンティーズム傾向尺度の因子

因子名	項目例
F1：チーム内の人間関係 ($\alpha = .859$)	・チームメイトの期待に応えたいから ・指導者の評価を損ねたくないから
F2：競技へのコミットメント ($\alpha = .836$)	・競技力を向上させたいから ・練習をしたいたから
F3：チーム内の出席圧力 ($\alpha = .801$)	・指導者に出席するよう言われるから ・休みづらい雰囲気があるから
F4：チーム外の人間関係 ($\alpha = .807$)	・家族や身近な人から怒りや不満を抱かれたくないから ・家族や身近な人の評価を損ねたくないから

表 2 プレゼンティーズム動機尺度の因子

2) プレゼンティーズム傾向尺度について、再検査信頼性の検証を行った結果、級内相関係数は $ICC = .785$, $95\%CI: .609 - .883$ であり、十分な値の結果が得られた。基準関連妥当性として過去 12 ヶ月間に出席した日数との間の相関関係を検討した結果、有意な相関関係が認められた ($r = .35$, $p < .01$, $95\%CI: .23 - .47$)。プレゼンティーズム動機尺度について、再検査信頼性の検証を行った結果、 $ICC = .835$, $95\%CI: .692 - .912$ であり、十分な値の級内相関係数が得られた。併存的妥当性として F2：競技へのコミットメント得点とスポーツコミットメント得点との関係を検討した結果、一定な有意の相関関係が見られた ($r = .38$, $p < .001$, $95\%CI: .25 - .49$)。3) チーム内の競技力 (レギュラー, 準レギュラー, レギュラーではない) を独立変数、プレゼンティーズム傾向尺度得点を従属変数とした被験者間計画の一元配置分散分析を行った。その結果、F3：身体的不調以外の全ての評価項目において、有意および有意傾向な群の主効果が確認され、多重比較の結果から、身体的不調以外は準レギュラーが無理に出席することが示された。

4. 結論

本研究においては、一定の信頼性および妥当性を有するプレゼンティーズム測定尺度が開発され、定量的かつ包括的にその実態をとらえる準備が整った。図 1 に本研究の結果から得たプレゼンティーズムモデルを示した。今後はストレスやバーンアウトといった、プレゼンティーズムがもたらす影響について検討するための縦断的研究が必要であると考えられる。

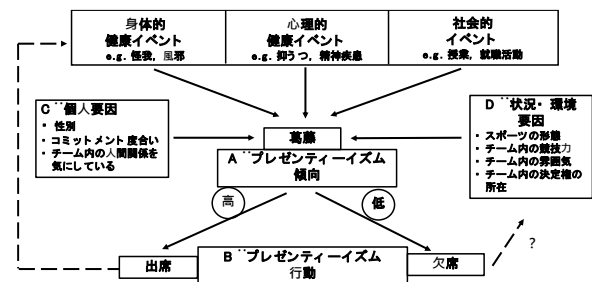


図 1 アスリートのプレゼンティーズムモデル